

## 若い画家たちの師としてのレンブラント

京都大学が東京・品川の「京都大学東京オフィス」で開く連続講演会「東京で学ぶ 京大の知」のシリーズ 14「美術研究最前線」。2月27日の第2回講演では、文学研究科の中村俊春教授が「若い画家たちの師としてのレンブラント」と題して、17世紀オランダの巨匠・レンブラントが、師として弟子たちをどのように教育していたのかを語った。

### ●17世紀の画家の工房



「レンブラントは、弟子には勤勉さを求め、自らも共に描いて手本を示しながら、熱心に指導する師でありました」と中村教授

16～17世紀のフランドルやオランダ絵画を専門とする文学研究科の中村俊春教授が、今回取り上げたのは、オランダを代表する画家・レンブラント（1606～1669）だ。独特の明暗法で知られる、17世紀最大の画家の一人でもある。

「レンブラント研究は、ここ30年ほどの間に大きな転換点がありました」

従来、レンブラントは独創的な才能を持った孤高の画家とのイメージを持たれてきた。もちろん才能に対する評価に変わりはないのだが、ただ1人で制作していたわけではなく、他の画家と同じように工房を持って弟子を指導し、弟子とともに制作に当たっていたことが分かってきたのだ。

「本日は、レンブラントが師として、どのように弟子を教育していたのかをお話したいと思います」

まず、当時の工房はどのようなものだったのだろうか。

工房風景を描いた絵では、親方画家が1人おり、多くの弟子が制作を手伝い、デッサンの練習に励むかなり年少の者もいる。また、ヤン・ステーンの〈弟子の素描を直す師匠〉という絵では、手本をもとにした弟子の素描を、親方が訂正を加えながら指導するという場面が描かれている。

レンブラント工房でも同じような指導が行われていたが、特に、売れっ子画家だったレンブラントには弟子が多かったようだ。現在、名前が分かっている画家だけでも40人以上に上り、弟子の多くが才能ある画家として独立している。「レンブラントは教育者としてもかなりの腕前だったのでしょ」

## ●レンブラント工房でのレッスン

説話画家として著名なレンブラントのもとにも、説話画家を目指す者たちが集まった。

説話画とは、聖書や神話などに描かれた物語的場面を描いた絵のこと。絵画には肖像画や風俗画、風景画や静物画などのジャンルがあるが、15世紀以降の美術理論では、説話画はそれらのジャンルよりも高い位階にあるとされてきた。

その理由はいくつかある。

扱う主題が聖書や古代神話など、高貴であること。そして、説話画家はそれら古今の歴史に通じ、深い教養を有していなければならない。

物語を描くには、人や物や風景など、あらゆるものを描く能力が求められる。

さらに、説話画家は、単に見えるものを模倣して描き出す能力だけではなく、知性の働きにより、物語をいかに表現し、どのように絵画化するのかを構想しなければならない。

これらの点から、説話画家は非常に知的な仕事と考えられていた。

では、説話画を目指す画家たちへのレッスンとは、どのようなものだったのだろうか。「まずは、人間のさまざまなポーズを正しく描けるよう、人体デッサンが重視されました」

弟子たちと一緒にレンブラントもモデルデッサンをする様子を描いた素描がある。さらに、弟子が描いた<若い男の裸体習作>デッサンの際、レンブラントも同じモデルのエッチングを制作しており、こうした版画を弟子たちの手本としていた。

「実はこの教材には、弟子を励ます意味も含まれています」と中村教授。右下のほうに、歩行器をつけた赤ちゃんが描かれているのだが、レンブラントは弟子を赤ちゃんにたとえて、「歩けなかった赤ちゃんだって歩けるようになる。だから忍耐強く練習すれば人体を描けるようになる」と、絵を学ぶ上での大切な姿勢を伝えているのだ。

「レンブラントは勤勉さを要求する師匠であったのです」

## ●模倣から始め、バリエーションを試みる

絵を学ぶ上で基本となるのが「模倣」である。

例えば、レンブラントの最初期の弟子であるイサーク・ジューデルヴィルが描いた肖像画は、容貌の不自然な特徴、ハイライトの過剰な使用など未熟な描写が認められるものの、片方から強い光を当て、片方を陰にするというレンブラント様式をまねている。こうした模倣によってさまざまな技法を習得していくのである。

もちろん、模写だけでは独自の作品を生み出すことはできない。

「模倣から一歩進むための訓練の方法にはいくつかあります」

1つは、他人の作品の改変、転用、組み合わせによって新しい作品を生み出すという手法である。

もう1つは「アエムラティオ (aemulatio)」である。ラテン語の「aemulatio」は「まねて、それを凌ごうとする」という意。つまり、画家が意図的に他の画家と同じ主題を取り上げ、モチーフや構図もある程度類似した作品を制作し、出来映えを競うということだ。

実際、レンブラントの多くの作品も、師であるピーテル・ラストマンの作品のアエムラティオとして構想されている。

例えば<バラムとロバ>では、「天使が現れてロバが前に進めない」という内容を表現するのに、ラストマンはごく当たり前にロバの前に天使を描いたが、レンブラントは天使をロバの後ろに描いている。「レンブラントは劇的な構図にすることに夢中になっていたのでしょう。絵としてはユニークですが、これだとロバは前に進んでも問題がないこととなります」。時にはこんなこともあったが、先例を凌ぐべくバリエーションに挑んでいたのだ。

レンブラントも弟子たちに対し、模写しながら自分なりの解釈で変化を加えていく方法によって、構想力を育てようとした。

例えば、レンブラントの有名な作品<トビアスの家族のもとを去る天使>だ。トビアスと旅を共にした天使が正体を現して家族のもとを飛び立つ場面で、レンブラントは家族それぞれに異なる反応を表現した。しかもこれで満足せず、その後制作したエッチングでは、もはや天使の足しか描かず、家族の驚愕を中心に据えている。

この主題に対し、ある弟子は、天使の顔が見えるよう前向きに描いている。「この構図だと、天使が飛び去るのではなく、今まさに現れたという印象です。レンブラントと同じように、構図を変えることに夢中になった結果でしょう」

ウィレム・ドロストの素描は、驚愕よりも、神への感謝が主題となっている。アブラハム・ファン・ダイクは、レンブラントの構図を左右逆転する手段を使い、さらに旅から帰

ったところであるという場面を表現するのにロバを描いている。

「物語を正しく理解した上で、それにふさわしいアクセサリーを描き加えることが、腕の見せ所でもあるのです」

こんな例もある。レンブラントの〈アブラハムの犠牲〉は、「息子を神に犠牲として捧げるよう告げられたイサクが、泣く泣くアブラハムの首を切ろうとするまさにその時、天使が現れてアブラハムは救われる」という場面。注目は、天使がイサクの手を取り押さえ、ナイフが空中に舞うように描いている点だ。こんな描写をした画家はほかにはいない。

「それでもまだ物足りなかったのでしょうか。もっとドラマチックに描くにはどうすればいいのか考え、弟子に、天使が後ろから登場するように描かせました。これだと天使の登場がより突然なものとなり、驚きは大きくなります」

## ●どこまで描き込むべきか？

「説話画で問題となるのが、主題を人に伝えるために、どれだけ描いたらいいかということ。つまり、中心主題に集中するのか、副次的要素も描くのかということです」

レンブラントはダイナミックな省略を行うことで有名な画家だ。例えば〈義父を威嚇するサムソン〉は、サムソンが自分の妻をほかの男に与えてしまった義父に対して激怒する、という旧約聖書の一場面。決して有名な話ではなく、サムソンだけに集中し過ぎて、主題が分かりにくくなっている。

弟子による模写ではレンブラントの指示によって左側が継ぎ足され、ヤギが描かれている。旧約聖書にはヤギを手土産として義父のもとを訪ねたと書かれており、これでサムソンであることが明確となる。弟子の作品ではないが、義父が代わりに 2 人いる姉妹の 1 人を嫁にやると提案して、サムソンがさらに激怒したという話から、姉妹まで描いた版画もある。

「副次的要素を描けば分かりやすいけれど説明的になる。中心主題に集中すると劇的にはなるけれど、物語が分かりにくくなる。こうしたジレンマが常にあるのです」

レンブラント自ら試行錯誤し、弟子にも試してみさせながら、工房では、説話画を的確に描くためには何のモチーフを削除して、何を描けばいいのかが議論されていた。

## ●実践的な制作によって想像力を鍛える

かつてレンブラントの弟子であったサミュエル・ファン・ホーホストラーデンは、レン

ブランドから受けた教育を思い出し、次のように述べている。「画家は、想像力によって生き生きと物語の情景を思い浮かべることができるようにならねばならない。そして、そのための鍛錬として、多くの説話場面を素描で描け。理論を学ぶよりも、実践的な制作を通じてこそ、画家は自らの想像力を鍛え上げることができる」

“理論より実践”こそ、レンブラントの教えの神髄である。中村教授の講演は、「レンブラントの師としての熱心な姿」を鮮やかに切り取ってみせたものだった。



17世紀最大の、そして孤高なる画家というイメージだったレンブラントの「熱心な師としての姿」に、参加者は興味深そうに耳を傾けた